絵を学ぶ大学ガイド
武蔵野美術大学

武蔵野美術大学で究める。

1929年の創立当初から、幅広い学科を備えて造形各分野の専門家を養成してきた武蔵野美術大学。その中でも伝統的な技法である日本画を学び、イラスト的手法と日本画的手法を織り交ぜた独自の作品を描いている、日本画学科4年生の齊藤拓未さんにお話を聞いた。

齊藤さんの「偶然」（2016年制作／F120号変形1303×1900mm／高知麻紙、岩絵具、水干絵具を使用）

齊藤拓未さん

武蔵野美術大学造形学部日本画学科4年に在籍。入学以前から10代の女の子をモチーフとした絵を制作している。大学で学んだ日本画の技法を駆使して、日本画的手法とイラスト的手法を取り入れた独自の作品を描いている。

1996年　東京都調布市生まれ
2014年　武蔵野美術大学造形学部日本画学科入学（現在 4年生）

●展示
2016年　ビッグウェスト学生フェスティバル美術展
2017年　齊藤拓未 個展／ぎゃらりぃ朋
2017年　「ここを先途と」武蔵野美術大学日本画学科学部3,4年・大学院1年 有志展
2017年　「選択肢1」12号館地下展示実習

●SNS
twitter @dandanheru
tumblr http://ichigoclub.tumblr.com
facebook fb.me/yuudon0116

——齊藤さんの体験について伺っていきたいと思います。まず、大学へ入学してから絵を描き続けていて、高校のときと変化はありましたか？

齊藤　高校生のときから女の子をモチーフに描いてはいたんですが、かつてはイラスト風のデフォルメタッチばかりで、写実的に描くようになったのはムサビに入学してからです。大学生になってからは、描きたいという気持ちは変わらないまま、さらに深いテーマで女の子というモチーフに興味を持つようになりました。今は、女の子や少女というモチーフはモノのように世の中で扱われている、と思うことがあって、その子たちの生活や抱えている事情、思っていることなどの背景を描き出したいと思っています。高校生のときにはただ可愛いものが描きたいという感覚で作品をつくっていたんですが、絵に込めるテーマを今のように考えながら描くようになりましたね。少女の持つ精神的なものを、表情にこだわることで表現したいです。

——高校生のときとは違う環境や思いの中で、絵のタッチや展示活動への挑戦意識なども、同時に変化してきたんですね。

齊藤　そうですね。実際に展示などで人前に作品を出すようになって、悲しげなイメージで女の子を描いたときに、見た人に少しでも共感してもらえるという体験が嬉しいです。初めてわかってもらえたと思ったときは、外に向かって発信するのもいいな、と思いましたね。

——作品を通して思いが通じる機会ができたということなんですね。

齊藤　はい。展示をするようになってそういう経験ができることに喜びを感じるようになりました。

——日本画は、入学以前はなかなか描く機会のない画材のようにも思います。ムサビの中でも、日本画学科を選んだのはどうしてですか？

齊藤　オープンキャンパスや芸術祭で日本画の作品が一番目に留まりました。それまでほとんど日本画に触れてこなかったけれど、岩絵具の色合いや繊細な表現に魅力を感じ、憧れを感じたのを覚えています。

——齊藤さんは深いところまで考え込んで、作品に取り組んでいるんですね。出来あがった一枚の中に自分の思想が込められているのが、見た人にもわかるなと感じます。そういった技術だけではない細部や表現へのこだわりが、絵に表れていると思うのですが、このようなことはいつ頃から意識するようになったのでしょうか？

齊藤　やっぱり作品の講評があると、中途半端にできないなと意識も変わります。先生の指導や友人との会話でも、自分で思いつかなかったポイントを指摘してもらえたり、参考になる作家を紹介してもらえたりといった発見がありますね。そういう経験も、作品に取り入れていきたいと思っています。

——齊藤さんの絵を見て、先生からアドバイスがあるんですね。

齊藤　そうです。他にも、描きたいイメージを先生に相談すると、表現方法や構図のアドバイスをもらえたりします。曖昧だったイメージも相談の中で考え直すことができるから、安易にテーマを決めることがなくなりますね。何回も構想を練り直して絵を描くことで、出来あがりを見たときに表現したいものになったと、思えるようになりました。

——先生からもらったコメントで印象的だった言葉はありますか？

齊藤　私の場合は描きたいモチーフが固まっているので、普段と違うモチーフや描き方もしてみるように先生から言われてからは、琳派のような日本画的表現をさらに背景などに取り入れてみるようになりました。表現方法としては自由に描くことが多いのですが、先生から、例えば絵具の質感を変えてみることを提案されたときなど、絵具によって変わるボコボコやざらつきを意識して絵の表現に取り入れてみました。写真ではわかりにくくなってしまいますが、こういったところも実物を見たときならではの風合いになりますね。

——高校生から見たら、美術大学に集まる人たちには特徴的な人がいるんじゃないかと思われるのではないでしょうか。齊藤さんが実際に入学してみて、気になるような人は多かったですか？

齊藤　高校のときには周りに絵を描く人がいなかったので、ムサビに入ってからは絵の話も趣味の話も共通してできる人ができて、人と関わる幅も増えて、以前より自分らしくいられるようになったと思います。

——いま齊藤さんは4年生になったわけですが、ムサビでの授業や学生生活から、何か影響はありましたか？

齊藤　自分のコンプレックスを原動力にして絵を描くことがあるのですが、コンプレックスに対して辛いとしり込みするだけでなく、向き合って作品にする力は、ここで身につきました。ここに集まったいろんな人たちと触れ合うなかで、自分の作品でも、理想とする女の子の描写に影響があったと思います。最近は描きたいと思っている友人がいて、これまでは想像上の女の子を描いていたんですが、いろんな人に興味を持つようになったんだと、自分の成長を感じました。

——大学に集まった人たちとの交流も、齊藤さんの絵の源になっているんですね。お話、ありがとうございました！

齊藤さんのドローイング作品（2016年制作）

齊藤さんの「またたき」（2015年制作／410×318mm／岩絵具と水干絵具を使用）

齊藤さんの「見えない重さ」（2017年制作／410×318mm／高知麻紙、岩絵具、水干絵具を使用）

齊藤さんの「減り方」（2017年制作／333×242mm／高知麻紙、岩絵具、水干絵具を使用）

日本画学科の4年間

1年次　日本画の基礎を学ぶ。日本画には独自の素材や用具の名称があり、基礎技法や様々な古典技法がある。絵具の溶き方や墨の表現技法、植物写生、風景写生へと進んでいく。

2年次　基礎的な技法の習得とともに、絵画の発想や構成力、造形力などを学び、自身の絵画表現の基盤を築く。動物や鳥、魚などを観察・素描し、生き物のフォルムや動きを捉えていく。

3年次　2つのクラスに分かれ、担当教員から対話形式で指導を受ける。学生各自がテーマやイメージを考えて新しい表現方法に挑戦し、創造する力と感性を養えていく。

4年次　独自の発想を重視した制作を行い、卒業制作に取り組む。卒業制作へ入る前に発想下絵（エスキース）や構想、下図などは教員から個別に指導を受ける。作品は全学的規模で開催される卒業制作展に出品する。

ムサビ生対談

「世界観」を立ち上げるために。

岩絵具などの伝統的な画材で制作する日本画学科の齊藤さんと、
手描きもデジタルも駆使する視覚伝達デザイン学科の寺町美代子さん。
学科を越えて友人だというお二人に、大学でのお話を聞かせてもらった。

写真左は齊藤さん、右は寺町さん

齊藤さんの「少し遠い」
（2016年制作／1620×970mm／
高知麻紙、岩絵具、水干絵具を使用）

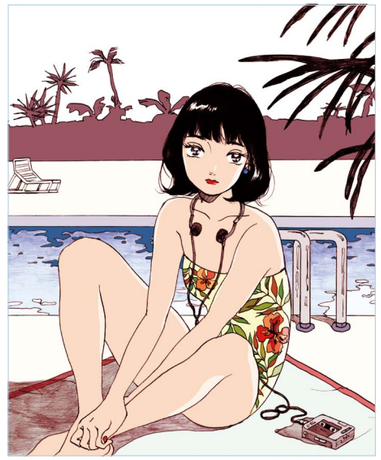
――お二人は異なる学科に所属していますが、何がきっかけで知り合ったんですか？

齊藤　学内に共通の知り合いがいたんです。その知り合いとは予備校から一緒で、彼女がもともと活動的だったので、私もその影響を受けて活動をしてみようかなと思うようになって。

寺町　私の友だちが齊藤さんの友だちと合作で作品を作ったことがあって、そのつながりからtwitterで齊藤さんの作品を見るようになったのがきっかけでしたね。初めて作品を見たときにこんな人がいるんだ、と思いました。実際に話したのは、ムサビの芸術祭で齊藤さんが友だちと二人で展示をしていたときです。twitterではずっと齊藤さんの絵を見てましたが、やり取りはなかったんです。

齊藤　芸術祭が最初の出会いでしたね。芸術祭では寺町さんのポスターが外に何枚も貼ってあって、その絵がとても印象的でした。

寺町　そのポスターは、私と同級生が3人で展示会をしようとしたときのものですね。3人とも女の子をテーマに描くことが多かったので、ポスターではそのテーマが表現できるように、光を感じるようなイメージを描き上げました。SNSでは、齊藤さんのように共通の知り合いを介してつながることも多いですが、そこで知り合った人たちが同じ大学の人だった、ということがけっこうあります。



寺町さんの「熟海にて」

齊藤　大学を通じて絵を描く人同士が通じ合えることって、ほんとに面白いことだなと思いますね。

――学科を越えた交流は、普段からあるんですか？

寺町　私の場合は人形劇サークルで、他の学科の人と知り合いました。学科は別でも、同じ方向で将来を見ている人などもいます。でもたいていはイベントでひと言二言交わすだけになってしまいますね。齊藤さんとのように続けて一緒に話し合えることは稀です。

――絵についての話ですが、絵画とデザインとの共通点は何だと思いますか？

齊藤　そうですね。デザイン側の人の描く人物のイラストは、線で描く場合が多いですが、線画で描くというのは日本画でもよく言われます。だからこそ、デザインを学んでいる人のそぎ落とした線などに憧れを感じますね。

寺町さんの「日曜の午後」

2017年2月に開催した「ぎゃらりぃ朋」での齊藤さん個展

寺町　齊藤さんはイラストと日本画の中間の表現もできていて、初めて見た絵も、イラストなのか日本画なのか分類が難しいようなすごい作品でした。齊藤さんの絵からはフェチズムも感じて、作品に込められた意図を考えさせられます。リアルに描いているのに可愛く表現するのは難しいと思います。日本画とイラストが上手く混ぜ合わさっています。

齊藤　画風については私にとって今の課題でもあって、もっと現実にありそうな生々しさで、でもイラスト寄りの絵を描きたいという思いがあります。変に描いてしまうと違和感が出てしまうので、そこはもうちょっと突き詰めて描けるようにしたいですね。

――では最後に、お二人がムサビに来てよかったと思う点はなんですか？

寺町　美大を目指して入るまでが大変なので、受験までがんばる時期に結構力が付きます。受験期にデッサンを積んでいた分、入学時にはそれらの技術力を身につけた上でデザインを学んでいく、という姿勢が4年間とれます。入ってからも、いろんな背景を持った人が大学にいて、普通に現役の人もいれば、高校卒業から何年かは別の活動をしていた人も、就職して社会人経験を経てから入学したという人もいます。学科の垣根を飛び越えて交流があるのも面白く、人によって学科によって、やっていることが全然違うなと思います。

齊藤　違う年齢の人も同じ学年にいたり、絵の上手な人がたくさんいて、ムサビで毎日刺激をもらっています。美術に関わっている人たちと日々会うというだけで、実感することがあります。高校のときに他の道を選んでいたら、会えなかった人や味わえなかったことがここにはあると思いますね。

垣根を越えた学びがある。

上 2015年10月の武蔵野美術大学芸術祭で行った二人展
下 日本画学科のアトリエにて、新作に取り組む齊藤さん

寺町さん課題作品。実在する美人画をすべて笑顔に描き変えるという取り組みを、「微笑みの美人画」「微笑まずの美人画」という二冊にまとめた

寺町さん芸術祭展示

武蔵野美術大学

絵画、立体、デザイン、映像、建築など幅広い領域の
11学科を有する日本屈指の美術大学。

●真夏のオープンキャンパス 2017「ムサビを知る！」開催！
8/12（土）・13（日）
10:00〜16:00

詳細はHPにて
http://www.musabi.ac.jp/

●イラストフェス vol.2 出展！
エス編集部が主催するイベント「イラストフェス vol.2」に、ムサビも出展！　今回インタビューされた齊藤さんと寺町さんもブースに参加予定です。